宮にひざまづきて、名字を問はれんとき、佛號を唱へしめんために、阿彌陀佛名をつくべしとて、みづから南無阿彌陀佛とぞ號せられける、これ我朝の阿彌陀佛名のはじめなり、

〔愚管抄 六〕建永の年、法然房と云上人ありき、まぢかく京中を住所にて、念佛宗を立て、專宗念佛と號して、たゞ阿彌陀佛とばかり申べき也、それならぬこと顯密のつとめはなせそといふ事を云出し、不可思議の愚癡無智の尼入道によろこばれて、この年のたゞ繁昌に世は繁昌してつよくおこりつゝ、その中に、○中略東大寺の俊乘坊○源重は、阿彌陀の化身と云こと出きて、わが身の名をば、南無阿彌陀佛と名のりて、萬の人に、上に一字おきて、空阿彌陀佛、法あみだ佛など云名を付けるを、誠にやがて我名にしたる尼法師おほかり、はてに法然が弟子とて、かゝる事ども出たる、誠にも佛法の滅亡うたがひなし、

〔源平盛衰記 十九〕文覺發心附東歸節女事

左衞門尉渡ハ、僧ヲ請ジ、剃髮、三聚淨戒ヲ受持テ、俗名ニ付タリシ渡ト云文字ニテ、渡阿彌陀佛トゾ申ケル、生死ノ苦海ヲ渡テ、菩提ノ彼岸ニ屆カン事ヲ志、渡阿彌陀佛トモ云ケルニヤ、遠藤武者モ入道シテ、在俗ノ時ノ盛遠ノ盛ヲトリ、盛阿彌陀佛ト云ケリ、失ニシ女ノ骨ヲ拾、後園ニ墓ヲ築、第三年ノ間ハ、行道念佛シテ、不斜弔ケルトゾ承ル、去バニヤ夢ニ、墓所ノ上ニ蓮花開テ、袈裟聖靈其上ニ座セリト見テ、サメテ後歡喜ノ涙ヲ流シケリ、其後盛阿彌陀佛、日本國ヲ修行シテ、求法ノ志最苦也、斯リシカバ智者ニナリ、盛阿彌陀佛ヲ改テ文覺ト云、

〔法然上人行狀畫圖 二十〕河內國に天野の四郎とて、强盜の張本なるものありけり、人をころし、財をかすむるを業として、世をわたりけるが、としたけて後、上人の化導に歸し、出家して敎阿彌陀佛と號しけり、

〔源平盛衰記 九〕堂衆軍事